

■■ 特集「パーソンセンタード・アプローチとの出会い」

私の歩み (This is Me)

田 畑 治

(名古屋大学名誉教授・同朋大学大学院客員教授)

はじめに

このたび、本特集の編者・坂中正義教授から、私に誌上参加の依頼がありました。厳密に言いますと、私の“源流”はPCAに先行する“Client-Centered-Therapy (CCT:クライアント中心療法)”の感じがありますが、自己の心理臨床実践上も研究上も、C.R.RogersのCCT・PCAの理念に根ざしながら関与してきた第2世代の一人として快諾いたしますと共に、声がけしていただいたことを感謝いたします。

まずは先の12月15日に開催のシンポジウムの登壇者3氏には、以下のようなパーソナルなコメントをさせていただきます。

村山正治先生は私の京大時代の先輩で、私が大学院入学以降、私の研究、PCA関連の全国学会やSC・WG会議等で今日に至るまで私たちを支援してください、つい最近も『スクールカウンセリングの新しいパラダイム』を出版され、絶えず“チャレンジ”され、“チェインジ”されております。

梶瀬直子先生は彼女が京大大学院進学時から会い、その後先輩・稔先生と結婚されて、ご夫妻ともにわが国で初めてRogersのお膝元・カリフォルニア州ラ・ホイアのWBSI⇒CSPで2年間にわたり研修をされ、継続的に“線”で薫陶を受けられた先生方です。また直子先生は、Rogersの1970年以降の著作の翻訳書やご自身の著書が出版される都度にご恵送してくださっています。

飯長喜一郎先生はPCA関連学会、東海地区学会やその他で親しく接している先生です。いつも温顔で、とても率直な自己開示をされ、好感がもてます。また“実験的カウンセリングにおける体験目録の因子分析的研究”の遂行や“上善如水”も忘れていなくて、感謝です。

さて、このたびの特集テーマで私の強い関心は「PCAの源流をたどる」を

見て直観的に浮かんだことは、かつてRogers, C.R.らが、1950年代後半にクライアント中心療法で鋭意取り組んだ“過程尺度”（process scale）の段階づけやストランズ（撚糸の意）の“源流”や“取組み”についてでした。そこでそれらを念頭に置きながら、私のCCTも含むPCAとの出会いや実践研究の歩みの“**This is Me**”を段階づけしてみようと考えました。以下1～7までです。

1. 幼少年期と思春期・青年中期時代

<1940・昭和15年～1958・昭和33年までの18年間>

私の場合、生まれ故郷・山口県瀬戸内海・周防灘の美しい自然、田畑での農作業や継続して家禽などの飼育経験で粘り強く辛抱すること、中学時代のスポーツで体力や精神力の啓培がPCAの源流になる経験・“前段階”

私は同県光市の山の手の、風光明媚な“御手洗湾”や松原海岸が遠望できる親戚で元旦に誕生しました。父親が光市近辺の国民学校（当時）の教員をしていた関係上、われわれ両親・姉・私・弟の5人は当時叔父・叔母宅の別棟に身を寄せていました。従って私の源流はRogersの北アメリカ大陸・中部の大都市シカゴと異なり、気候温暖な瀬戸内海にあります。

1945・昭和20年夏・太平洋戦争が終結後、佐合島から国民学校入学前に祖母が住む菩提寺のある瀬戸内海・周防大島（＝屋代島）に帰り、3世代7人家族になりました。父親は私が小学校4年まで祝島という離島に単身赴任していました。3世代家族では当時の父親の給料だけでは賄えず、母親は雨の日以外は食糧増産にと野良畑で農作業に勤しみ、われわれも栄養補給にと、鶏・ヤギ・羊・ウサギを飼育し、その種つけや出産の世話もしました。日曜日には一家総出で猫の額ほどの段々田畑や山林で耕作や作業労働をしました。梅雨時には段々畑は土砂崩れに遭い、その修復に土砂除去や石割作業もやり、花崗岩にも石目があるのを発見したりしました。父親はよくそこを“**勤労・実学の場**”・「横山大学」と呼んでおりました。

また夏場には父親と3歳年下の弟と3人で手漕ぎの木造伝馬船に乗り、内海の遠くの小島（浮島）の磯場にヤスでの素潜り漁に出かけました。快晴の日には遠くの空に入道雲がもくもくと浮かび上り、刻々と姿を変え、後に大学で学ぶ投映（影）図のように感じ、また心の流れの読み方「**関係のなかで海流や風向きを読みとる**」、「**潮の干満**」<一丸藤太郎編『私はなぜカウンセラーになったのか』創元社、2002年、Pp.221-241.>も学びました。祖父は、やまじ風や海が荒れた日などは心配して対岸で夕暮れまで待っていてくれて、海行きも一家挙げての共助になりました。

海面下の姿は、まるで“**万華鏡の世界**”を観る感じで、視聴覚・冷覚・味覚・触覚・嗅覚など実によく入り混ざっていました。オコゼ・電気クラゲ・鱻（フカ：サメ）には細心の注意を払い、海底の穴場・“釜”で石鯛などの獲物に出

くわすと“息をつめて”接近しました。これはCCT・PCAで個人や10数名の小グループとの最初の出会いや治療関係の慎重な確立にも共通する感覚です。<<なお1983年来日したRogersと「禅とPCA」で対談した近藤章久先生【精神科医・私学八雲学園々々】は、私が通った安下庄（あげのしょう）高校（現：周防大島高校）の地元生まれ、小5年までの育ちで、因みに平安時代に菅原道真公が九州・大宰府に流される際に停泊した安下庄は“安全に下るように”と命名された土地の生まれです。近藤先生は少年時代に父親に連れられ、“いのちの海”での鯛釣りの経験を述べられ、鯛の行動特性や釣り糸の絡みの解き方がセラピーにも有効だといわれております。（『セラピストがいかに生きるかー直観と共感ー』：春秋社、2002年、Pp.26-27.）>>私も中学時代に行ったクロダイ釣りの経験があり、同感です。

2. 京都時代①

<青年期後期⇄学生期（1958年・昭和33年～1962年・昭和37年までの4年間）>

この時期はまだCCT・PCAは知識習得程度の自己評価の第Ⅰ段階

われわれの高校時代までは、日本はまだ終戦後の復興途上で、国内総生産（GDP）水準が低く、所得倍増論が提唱された時期でした。当時授業料が安い国立大に行くことが憧れの時代で、Ⅰ期校の目標は西日本の雄・九州大学か京都大学でした。当時の京都大学（以下京大）には浪人を覚悟で受験し、何とか合格しました。入学したら同学年の連中は受験浪人経験者が多くて男女とも皆“おとな”に見えて私ら地方出身の現役組数人は頭髪も“いがぐり頭”で劣等感に悩まされました。各高校の出身地では北は北海道から南は鹿児島までいました。沖縄は当時まだ米国統治下でした。

①京大は伝統的に“反戦と自由”の学風で、“放任主義・捨て育て”の教育方針といわれておりました。われわれが入学した昭和33年（1958年）には1回生は宇治分校（日本の旧火薬保管庫跡地で“ジャングル大学”のK新聞評があり、金網で隔てて自衛隊宇治駐屯地）、2回生は京都市内吉田分校（旧制第三高等学校跡地）でした。3回生以後の学部専門課程は、昭和31年建設の熊野校舎で過ごし、心理学基礎実験などは本部構内赤煉瓦の建物に分散していて徒歩か市電か自転車で移動しました。その後、昭和40年には京大本部構内に新館が建てられ、熊野地区は学生寮になりました。われわれが入学時から所得倍増計画を見込んで定員が増え、50名・1学科・5コース制：A（教育哲学）、B（教育課程）、C（教育心理学）、D（教育社会学）、E（教育行財政学）に分かれておりました（京都大学大学院教育学研究科70年史編集委員会編『資料に見る京都大学教育学部の70年』、2019年）。

②専門講義：私は概して授業には真面目に出ていた方だと思います。家からの仕送りだけでして食費は切り詰めましたし、アルバイトは無く遊ぶお金は

無しでした。講義にいくつか印象深いのがありました。中でも私が後に臨床心理学の中核に据えましたAコースの下程勇吉教授の教育学講義は人間形成の逆説的二重性、啐啄同機、代理不可能性・全体包容論や“テストクラシー”論に熱弁を揮われ、感激・感動しました。Cコースでは2回生時に正木正（まさきまさし）教授・苧阪良二助教授・梅本亮夫助教授・高瀬常男助教授のオムニバス形式の教育心理学講義がありました。特に正木先生は健康が優れないにもかかわらず自ら教育相談を实践され、独自の“魂の教育心理学”を力説され、感銘を受けました。しかし正木教授は私が2回生の夏休み明けの9月3日に肺エソと急性心臓衰弱のため、54歳で逝去されたのです。正木先生は戦後日本の教育改革にアメリカ教育使節団の教育指導者講習（IFEL）が企画されて来日した際に児童発達心理学のA.T.Jersildを通じてRogersを紹介された先人の一人でした。<<その他はわが国のカウンセリング界の草分け・友田不二男先生が居られ、Rogersの[Counseling and Psychotherapy,1942.の翻訳書・『ロジャーズ・臨床心理学』1951年、創元社]があります。>>

③卒業論文は、「悩みとなる病気等の背景に関する心理学的研究」といって小児マヒ、吃音、夜尿症、トラホームなど10個のコンセプトへの都会と田舎の児童とその保護者、および教師の見方や意識の“一対比較法”での文化社会心理学的な調査研究で、調査用紙の集計に夏休み中かけて取り組みました。

3. 京都時代②

<大学院修士課程進学から大学院博士課程満期退学（1962（昭和37年）～1967（昭和42年3月）⇨京大助手（1967（昭和42年4月）～1969（昭和44年9月までの7年半）>

この時期はCCT・PCAの自己評価で第Ⅱ段階の客観的・量的・実証的研究段階

昭和37年以降は日本の政治・経済政策では所得倍增政策が打ち出され、Cコースの仲間17名は学部卒業後に多くは企業の教育・訓練課に採用されて行きました。私は家では大学院進学を勧められており、Cコース内部からの進学者は私だけでした。

(1) 臨床経験の開始

①大学院で心理面接相談の開始：当時の私の日記によれば、5月4日・飛び石連休に心理相談の初体験とあります：5月4日（金）に初めて教育相談に取り組んだことが記され、「面接中に絶えず苦悩したのは立場の問題であった」とあります。5月10日（木）非常勤講師の畠瀬稔先生（京大の大先輩）の「カウンセリング演習」で「はじめてにしては（カウンセリングは）とてもよくできているといわれた」ことが記録されています。<この記述からカウンセリングでの褒めて育てることを学ぶ気がしました。>若干22歳過ぎの若造が親御さ

んの心理面接相談に手玉に取られたことが記憶にあります。考えてみれば、年齢格差があり大相撲で“横綱”（保護者）と“幕下”（初心のカウンセラー）に譬えて認識し、面接に臨んだものでした。時間外（木曜日・夜2時間半程度）の「プラクティス研究会（“プラ研”と略称）」に数名の大学院先輩とS内地研修員の計6、7名が参加する面接実践の逐語記録の検討会を持ちました。土曜日など面接逐語記録作りに明け暮れました。S研修員には録音記録を聴取してから「田畑さんは、どういうつもりで面接をしているのか!？」といつも開口一番に厳しく問われ、苦痛で嫌でしたが、今日ではとても有難かった気がします。率直に申しますと鍛えられたというのが本音です！

②Rogersの実際の録音テープ記録に出会う：大学院では日本育英会の奨学金が貸与されることになり、それも好作用し、7月下旬に京都市カウンセリング・センター主催の学校教員主体の研修会に参加しました。5泊6日の日程で、俗界を離れた涼しい比叡山・延暦寺宿坊が会場で運営形式は“学習者中心”に進められました。少数の大学院生の私たちは初経験であり、会の開始からどのように振舞うか戸惑い、“モヤモヤ・グループ”、“落ちこぼれグループ”になりました。その中の教材で前年1961年に京大アメリカ・セミナーの招きで来日時に実践したRogers（聴き手）が“金欠を訴える学生”（京大学生懇話会のTS先生が英語での話し手）の20分間のデモンストレーション・カウンセリング・ロールプレイの録音記録テープがあり、聴取しました。Rogersは面接終了の間際に3回くらい鼻声で“I respect you”を連続して伝えていたのがとても印象的でした。また講演でCCT・PCAの人間観の一端（＝トカゲは尻尾を切られると自らの力で伸ばしてゆく、生来に成長潜在能力が備わっている）という内容でした。<<氏原寛・村山正治編『ロジャーズ再考』培風館、2000年、第6章、Pp.103-108.>>これは私の方がRogersの肉声の調子や態度に感動し、“主体的に感化を受ける”契機（正木教授）になり、Rogersに初めて出会えたことになります。

③大学院では専任教員が主宰される共同研究にも加わる：私は故・正木先生の精神を引き継いだ高瀬常男助教授主宰の「信楽研究会」に入会し、その世話人に指名されました。正木・高瀬両先生は「魂抜き心理学（独：Psychologie ohne Seele）」への反骨精神に満たされておりました。フィールドワークには滋賀県信楽町（現：滋賀県甲賀市）にある信楽青年寮という入所・知的障がい青年の「共感関係」・「人格発達」の研究で、月一回は出かけました。施設長・池田太郎先生の間観は“ふれる・しみる・詫びる教育”であり、“受容的な雰囲気”、“信楽らしさ”、“教育的人間関係”や“社会とのつながり”とRogersのPCAの考え方と共通します。成果は東北大学で日本教育心理学会第4回大会が開催されて発表し、当時の発表資料は東北大学の教育心理学・塚田毅先生の研究室でガリ版摺りの資料を作成しました。

④仙台の日本教育心理学会に出かける東大グループとの出会い：東大出身の

山本和郎・越智浩二郎両先生ら「治療関係スケール、特に生命力スケール作成」の共同研究者・野村東助先生ら有志と上野駅始発の夜行列車で偶然出会いました。この先生方の『関係スケール』の取り組みは、私が後に博士課程で組んだ『体験目録』作成に刺激を受けました。

⑤修士課程在学、学外に研修に出かける：当時畠瀬稔先輩方の勧めもあって一日は「何もしない日」を創り、学外の大阪府中央児童相談所（所長：稲浦康稔先生；鈴木Binet法の鈴木治太郎の指導生）・判定課に嘱託判定員として大阪・森之宮まで終日出かけました。判定業務はテストバッテリーを組んでの知的情意的側面の各種テストであり、判定課長にまとめて報告するものでした。私はPFスタディの実施や解釈は得意になりました。

⑥自主的な読書会：隔週土曜日に京大人文学研究所員の心理学・牧康夫先生も加わられて臨床心理学専門書（原書購読が主）の輪読会を持ち、Rogers, C.R. (1951), Axline, V.M. (1947), Freud, S. (精神分析入門・続入門の訳本), Kline, M. (Child analysis) の原典を取り上げました。Klineの性器部位名を基本にした内容には困惑しました。牧先生は修士論文計画案の下相談など丁寧に細かくみて下さいました。

⑦修士論文は、「心理的葛藤としての問題行動の一研究－特に吃音児の自己意識と対人感情の分析を中心として－」がテーマでした。吃音児の特徴から4群に区分し、BC-SCインベントリーとPFスタディを組み合わせでの対象群比較研究でした。

(2) 修士課程から博士課程では研究題目を心理治療関係と人格変容の研究に変更

その契機はある非行少年との全面接回数が計6回で短期に終結した心理面接で、「逐語記録」もあります。単一事例の面接記録と『関係目録』との双方向からの比較研究でした。

①『過程尺度』か『関係目録』か：心理療法の面接を第三者の視点から研究する前者は、先に〈はじめに〉で言及したC.R.Rogersらの『過程尺度』を用いる方法です。そして後者のアプローチは当事者自らの認知からの方法です。Barrett-Lennard, G.T.が1962年に博士論文で作成し、使用した『関係目録』の方法です。その簡易版を用いて研究したものに鑓幹八郎（当時：京大助手）・村山正治（当時：京都市カウンセリングセンター）両先生、古川和子（京大教育学部卒、4年後輩）があり、私はこの簡略版を使わせてもらい、非行少年の面接の初回面接終了後と5回目面接終了後に実施しました。セラピストの得点はあまり変化しないのに、クライアントの得点でセラピスト認知・知覚が大きいたことが判明し、**初回と5回目ではクライアントの認知評価が天地逆転するほど、何故なのかが基本的な問題意識・課題になりました。**

②新規に『治療関係の体験目録』の作成と適用：この経験と結果から私は面

接要因を拡大して、面接前、- 中、- 後の3時点、それぞれに3⇨3⇨2の計8要因からなるセラピストの『関係の体験目録』を作り、因子分析や信頼性・妥当性の検討をしました。予備調査から集めた項目の各要因評定は森野礼一(神戸女学院大学)、村山正治(京都市カウンセリングセンター⇒九大)、西村洲衛男(京都市カウンセリングセンター)、浪花博(京都市カウンセリングセンター)の4先生にお願いしました。この研究の枠組みには指導教官・倉石精一教授から示唆を得ていたLewin,K.の「人間行動 (B)=f (パーソン (P), 環境 (E))」の関数というトポロジー心理学の考え方が基礎にあります。私の構想した公式・関数は「人格変容 (Personality Change)=f (Therapist, Client)」になります。これらは「セラピストの治療的要因の因子分析」(1967、『臨床心理学研究』)に公刊しました。また来談者用に同様な3時点、8要因からなる『関係の体験目録』を作成し、これは「クライアントの治療的要因の因子分析」(1968、『臨床心理学研究』)になります。

③身固めの結婚と博士課程修了資格論文の完成：博士課程では、それこそ命を懸けて朝夕に臨床実践と客観的研究に邁進しました。そのために先輩方もそうでしたが、1965年(25歳)時には結婚して身固めをしました。<<因みにRogersは僅か22歳で、厳格な家族の掟から解放されて幼馴染のヘレンと結婚し、ニューヨークに出立した記述が『自伝』(Rogers,1961)にあります。>>

4. 京都⇨千葉時代での職業生活①

<助手⇨専任講師・助教授：(京大助手から千葉大学専任講師・助教授に赴任(昭和42年・1967年10月～昭和50年・1975年8月までの約8年間)>

この時期は段階付けとしては物差し作り・客観的量的実証研究の推進(⇨事例研究)、CCT・PCAの自己評価第Ⅲ段階

この時期は日本が1960年代からの所得倍増計画での高度経済成長を遂げ、鉄道も新幹線が東京駅 - 新大阪駅間に開通し、1964年に東京オリンピックを開催した半面で、その負の遺産や歪みが生じ、これらの問題に向けて大学では学生闘争・運動が盛んになり、支配者・国家権力・(大学管理者)対被支配者(学生)との闘争構図はどここの大学でも大なり小なり生じました。象徴的には1969年の東大入試中止に伴い、全国から京大にも入試中止に向けて押し寄せ、まるで“百姓一揆”のような様相でした。他方、国会では「大学の管理運営に関する臨時措置法(大管法)」が成立して大学人は受難の時期になりました。1964年設立の日本臨床心理学会も心理技術者の資格問題を巡って紛糾して暗礁に乗り上げてしまいました。

①京大助手に採用されたこと：1967年大学院博士課程満期退学して4月からは助手に採用され、懐に辞表を携える覚悟での就任でした。“PCA精神である人間誰が相手でも大切に接すること”を自覚・確認しての毎日でした。非常勤

で土曜日に西宮市のS短期大学に出かけ、帰りには住居のある大阪府高槻市の自宅を横目に見ながら、また京大に引き返しておりました。

早速ですが大学紛争では教育・研究だけでなく臨床実践にも影響を受け、助手は心理教育相談室や来談者の安全確保に苦慮しました。経済発展のおかげで、反面で臨床心理学も強い影響を受けました。来談者が学生闘争・運動の被害を受けないよう、専ら安全と安心の確保をすることが助手の務めでもありました。心理教育相談関連の資料の移動保管などには院生も随分協力的になってくれました。もちろん臨床実践と博士論文研究の推進には手が抜けませんでした。

②関東の国立千葉大学に採用にされる：1969年10月から教員養成を主たる目的とする教育学部に縁があり、採用されて教鞭を取るようになりました。小学校教員養成課程免許取得に必須の「児童心理学」のみならず、専門柄選択科目の「臨床心理学」講義や「教育相談法演習（教育心理学選修）」なども担当しました。併せて私が臨床心理学の専門家だとのことで、学内人文学部の心理学のM先生やA先生方とともに「学生相談員」にも委嘱されました。この中で「教育相談法演習」だけは先輩の畠瀬稔先生が京都女子大学で実践中の「学生中心の授業」や、かつて見学させていただいた広島県三原市の小学校・TK先生の「人間中心の授業」に習って試行しましたが、失敗に終わりました。理由は当方にその力量が十分でなかったし、「教育相談法演習」の受講生に反権力・MPI粉碎背番号制阻止連絡会議の親派学生がいて“討論集会”に切り替えられたキライがあり、中断しました。やはり討議にも“自由と制限”の問題がありました。

③博士論文の完成と取得：1971年の元旦に雪が降り子ども達に雪だるまを作り、炭で目球を入れてやりました。その直後から博士論文を一本化する作業にほぼ毎晩のように取り組みました。元旦から執筆を始め、製本する3月までかかりました。論文題目は『心理治療関係による人格適応過程の研究』でした。3月末には京都大学に提出して11月末にはめでたく授与されました（論教博：第14号）。これで量的研究には区切りがつかしました。

5. 名古屋時代①・職業生活②

<名古屋大学助教授：(1975年8月～1986年6月まで) ⇨名古屋大学教授：(1986年7月～2003年3月まで) の約28年間>

この時期はいわば質量とも多角的な取り組みが必要になり、CCT・PCAの転回とともに独自の展開が求められ、自己評価の第IV段階

この時代背景は日本が経済的にGDPで世界2位になり好景気で安定しましたが、産業公害などの負の遺産処理問題、その後バブル崩壊や不安な経済状況になり、他方で少子高齢化に向かう時代になります。

名古屋時代①：心の専門職・職業生活：教育・研究、管理の他に学外心理臨床支援の取り組み内容の種類と広がり：縁あって1975年8月から大学院博士課

程を持つ伝統校・名古屋大学に採用され、赴任することになりました。研究面では、これまでのCCT・PCAの心理療法の客観的・量的な実証的研究から、治療者・クライエントの相互主観的・質的な、個別性を重視する実践⇔研究への転回や心理臨床家の資格問題や養成の問題にも関与し、発展・展開するようになりました。特に1982年に新規に日本心理臨床学会や日本人間性心理学会の創設に私も関与し、生身の人間の個別世界を重視する臨床事例研究運動の展開とも重なり、この時期は私の中で、大きな転回が起きる時期になり、基本的にはRogersのCCT・PCAの“最も個別的なものは最も普遍的である”に徹することになります。基本的にはPCAの理念に基づき、学部生・院生のみならず教職員などにも誠実に接触することに努め、私は教職・心理臨床が一貫した専門職ですが、人間関係で意識していることの一つに“親分・子分”という呼び方や上下関係は好まず、PCAの観点から対等・平等関係、気持ちとしては相手の“下側に立つ”(to understand～)スタンスを好みます。

(1) 心理臨床の諸活動

主として臨床心理相談室⇒心理教育相談室・心理発達相談室並びに学生相談室でのカウンセリング・心理療法事例での治療者・クライエントの相互作用に基づくプロセスの質的な考察を進めました。夢を扱った事例研究や幼少期の親喪失の事例研究や子ども喪失した親事例研究、青年期・成人期事例研究等に集約されます。それらは国内・外の国際応用心理学会議、世界精神保健連盟会議などに参加し、研究発表を行いました。

(2) PCA関連会議・研修会等への参加

①学生相談担当教官自らが受ける“ベーシック・エンカウンター・グループ”(BEG)のグループ体験：国立大学で主として学生相談に携わる教官(専任⇔兼任)が自ら主体的に“エンカウンター・グループ”を受ける経験を積もうとの意思で企画され、各地区国立共同利用研修施設に合宿形式で3泊4日(後に2泊3日)にわたり行われたものに参加しました。趣旨は学生相談で“小グループに携わる者”は最低100時間以上のグループ・メンバー体験をする必要があるとの認識からでした。第1回は1976年7月に九州大学の学生相談担当者(安藤延男教授、村山正治教授、峰松修講師)のお世話で“リーダーレス形式”で行われ、私がBEGの経験者と仰ぐS先生等約15名前・後が参加しました。この会はその後も愛媛大学(福井康之教授ら)の臨海実験施設、山形大学(末廣晃二教授)の蔵王温泉施設でのお世話で続けられました。私自身は小グループの中で自身の辛い困惑や苦痛の表出を通じて自他ともに揺さぶられて、思いがけず落涙し、他メンバーにふんわりと受け止められたりし、PCAの苦悩、心地よさや美しいあり様や人との繋がりと深まりにも出くわしました。また不消化部分は包んで帰りました。

②1978年に九州大学で日本心理学会第42回大会（委員長：村山正治教授）が開催された際に、シカゴ大学・E.T.Gendlin博士のFocusing講演や学外・福岡北部の津屋崎海岸で夫人M.Hendricks-Gendlinも参加してのFocusing研修会が開催され、私も伊藤義美氏（当時：大学院生）らと参加しました。その後、名古屋に帰ってからもFocusing研究会を立ち上げ、数年間研修を積み重ねました。このグループから後の1998年には伊藤義美氏（情報文化学部助教授）が「フォーカシングの空間づくりに関する研究」で博士学位を取得し、国際フォーカシング研究所認定のコーディネーターになり、今やわが国のPCAグループにも関与し活躍していることは頼もしいことです。

③その会期中に開催された“心理臨床の夕べ”に参加：54名の出席に端を発し、翌年1979年には名古屋大学で村上英治教授や中京大学・空井健三教授らと“心理臨床家の集い”という形でお世話し、1980年は東京地区・八王子セミナーハウスで、1981年は滋賀県大津市で心理臨床研究集会を開催し、ついに翌年1982年に九州大学で日本心理臨床学会第1回大会（委員長・成瀬悟策教授）が開催されました。PCAの創始者Rogersは1983年に人間関係研究会が主催した会に招聘され来日し、80余名の中に私も埼玉県嵐山町の国立婦人会館（現：女性会館）に出席しました（後述）。またその後、Rogersは1987年2月に腰の骨折療養中のところ、心臓発作で逝去されるという悲しい出来事が生じました。この追悼も踏まえ1987年11月の名古屋大学で第6回大会当番校企画シンポジウム：村上英治教授・伊藤義美教授・田畑らは「心理臨床の今日的課題を問う－C.R.ロジャーズが遺したものからの出発－」を企画し、佐治守夫（日精研・心理臨床センター）、島瀬稔（京都女子大）、村山正治（九州大）の話題提供、河合隼雄（京大）、鏑幹一郎（広島大）の指定討論で豪華な顔ぶれのシンポを持ち盛会裏に終了しました。

④1989年3月から文部省の在外研究員として10ヶ月間、アメリカのUCLAに派遣されて、心理学部S.Sue教授（minority；diversityの研究者）のもと「アジア系アメリカ人のメンタルヘルス国立研究センター【略号：NRCAAMH】」に所属しました。UCLAの研究センターでは“Scientist-Practitioner-Model”での主に数量的な研究をするのですが、当方も日本での心の健康・メンタルヘルス課題について発表する機会がありました。先ずUCLA当該大学の使命（mission）に“非差別”（non-discrimination）が謳われていることにPCAの理念と共通すると感じました。6月にはロスで普通乗用車の運転免許も生まれて初めて49歳で取り、マイカーで9月になりロスからラ・ホイアのCSPに故Rogers先生の追悼と生前中の感謝を兼ねての訪問をして歓迎され、N.Kandel所長から“Rogers Memorial Library”目録も拝受しました。しかし10年後夏季中に妻とともにCSPを再訪するとラ・ホイアの別箇所に移転して、郵便受けに数通の郵便物がたまっていました。

6. 名古屋時代②・職業生活時代③

<愛知学院大学教授⇕客員教授：(2003年～2014年まで11年間)：愛知学院大学退職以降の同朋大学大学院客員教授時代(2014年～2020年・現在までの7年間)>

この時期は日本の経済状況は“低成長・厳冬の時代”

私の研究は個別的な実践研究になりますが、さらに私学の管理運営(学部長や科長)に携わる時期でもありましたからPCAの自己評価は第V期になります。但し、既に指定された紙面が限度を超えています。掻い摘んで述べますと、①臨床実践研究、教育指導、そして管理運営にもPCAの考え方は終始一貫して意識して臨みました。また②文部科学省学術フロンティア推進事業で『『こころの専門家』養成後の研修プログラムの開発的研究』(2004～2006年)に代表者として関与し、人間性心理学への功績で2006年度(平成18年度)日本心理臨床学会賞を受賞したことは望外の喜びになり、わが生涯の歩み記念になります。

7. 結 び：PCAと私との出会い：“This is Me”

(1) PCAの源流・創始者・Rogers, C.R. (1902～1987) との出会いと接触

エピソード (i)：Rogersとは1983年に「人間関係研究会」が主体になり埼玉県嵐山町・国立会館で開催された時にじかに会えました。初日のセッション＝ウォーミングアップで80余名のメンバーが広い会場に二重円で交互に移動し、行き交う際にRogersはごく普通の“好々爺”で軽く肩に手を当てて通過するワークをしたのですが、きちんと温かな眼差しで合わせられました。私のイメージでは、その様は海中に住む“悠長なマンタ”のようでした。研修会期中は充実した企画内容でした。記念出版書『カール・ロジャーズとともにーカール&ナタリー・ロジャーズ 来日ワークショップの記録ー』(畠瀬直子・畠瀬稔・村山正治編、1985、創元社)は現在絶版で、高額プレミアムがついているようです。

エピソード (ii)：会期中の『禪とパースン・センタード・アプローチ』のセッション最中に起きた“地震(深度3?)”時のこと：あとでフロアから両先生へ質問がでた際に、Rogersは肩をすくめて「恐ろしくて机の下に入りたい気がしました!」との返答でした。フロアからそのユーモラスさに笑いが起こり、私もほんとうにその正直さとナイーブさにも痛く感じ入りました。これに対して近藤章久先生は地震の質問に対して泰然自若とされ、問いにも無然として“無応答”でした。近藤先生は心底から東洋の君子観がしました。

エピソード (iii)：非指示的な対応のRogers先生が“質問”をした?!：前年に私が単著で出版した『カウンセリング実習入門』(新曜社、1982年)を学恩にと、毛筆で献本のサインをして風呂敷に包んで会期中に会場で渡すチャンスを狙っておりました。なかなかその機会がなく、最終日前々夜にとうとう講師控

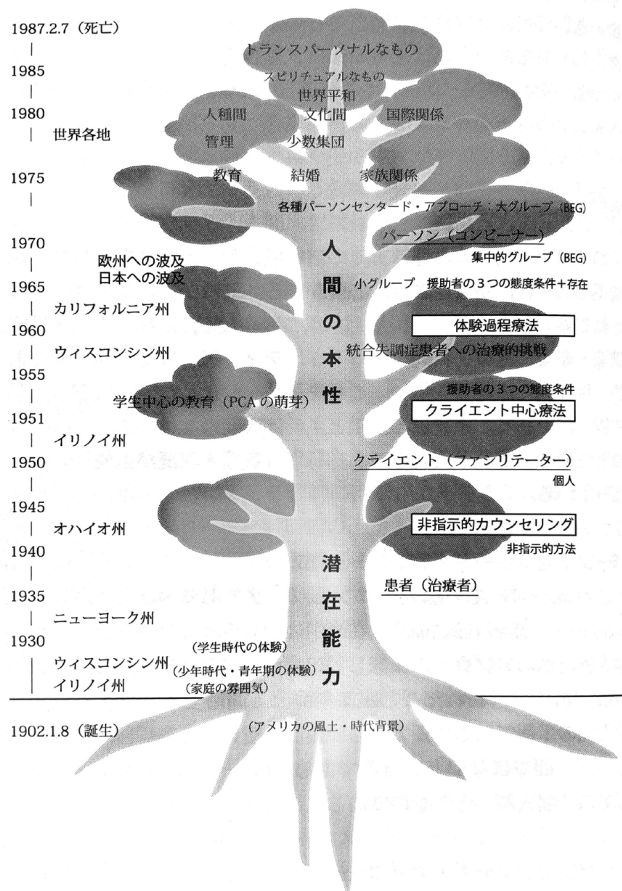
室にまで乗り込み渡しましたら、Rogersが“What’s book name?”と積極的に質問をされたではありませんか!?日本語が読めないから当然な質問ではありませんでした。

(2) 私が理解したRogersの、PCAの全体像

要点的に、以下の①～④の4点になります。

① 先ずPCAの源流・中流・下流・大河でのフィロソフィー（考え方）：PCAの中核理念は一貫し、かつ継続され大樹・大河を形成していること。図はPCAの発展・展開の系統樹図・イメージです（日本人間性心理学会編『人間性心理学ハンドブック』創元社、2012、P.58）。

つまり種々の人間関係の中で、一貫して個人（体）の実現力・成長力への全幅の信頼を寄せつつ、誠実にあること、無条件の肯定的な関心、内的な枠組みを共感的に理解しかつ伝え返すことの3つの態度条件と臨機応変の対応がなされ、個人やメンバーはその3条件を知覚・認知することです。Rogersの実践領域は非常に広大で遠大です。



PCAの発展・展開の系統樹図・イメージ（田畑、2012）

②コンタクトの相手は、(i) 患者⇒クライアント⇒患者・統合失調症者⇒パーソンへ、(ii) 個人⇒小グループ⇒大グループへ、(iii) カップル・マリッジペア・妊娠・幼少児⇒高齢者や死（スピリチュアル・霊性）まで、(iv) 単一性⇒多様性へ拡張したこと。そのイメージは海・池に投じた小石が次第に大きな波紋を描いて拡大するイメージになること。

③実践主体は“固着”せず、絶えず“チェインジ”しつつあること。

④実現・実践の場：専門相談機関⇒地域社会の各機関⇒国際的な場へと拡張していったこと。

(3) 私の場合の自己評価

CCT・PCAは前段階を加えて、第I段階から第V段階に展開しております。基本的にはCCT≥PCAであり、直近の“PCAパラダイム”から取り残されて、逸脱しているかもしれません。自己評価では、CCTの実践は“線”でやり、PCAの実践は“点”でやってきた感じです。また私の中での拘泥は、Rogers論文：1957年と1959年の「建設的な人格変容の“6つ”の条件」で、特に第6条件の変化（1957年では“治療者の条件”；本稿の初めに述べた「心理療法の過程方程式（1958年）」のストランズや1959年では“クライアント（パーソン）の条件”）であることです。先の<挿入図>から言いますと、1957年の「建設的な人格変容の第6条件」はRogersが1958年にシカゴ大学からウイスコンシン大学精神医学研究室に移り、メンドタ病院と連携し、“知覚や認知度の低い・動機づけのない”クライアント（患者）との心理療法で最難関とされる統合失調症者への取組みはこの第6条件の変換の指標になると考えます。印象深い事例はMr. James Brown (VAC) (Rogers, et al, 1967) に伺えます。私の博士学位研究（1971年）もその差異点に焦点化しました。

Rogersは、それ以後そこから時計の振り子のように180度転回し、知覚や認知度の高い、まったく健常者に向けて取組みを始め、場所も北アメリカの中部大陸部ウイスコンシン州から1963年から西海岸カリフォルニア州に移り、WBSI⇒CSPに所属し、世界を舞台にして広く実践し、かつ展開した“PCAパラダイム”、その取組みへの考え方や人間観は不変だといえましょう。

(4) 最後に蛇足

国連決議でのSDG's（＝持続可能な開発目標）に加えて、また21世紀の新課題として今後はCOVID-19への対応，“With Corona”時代の到来に向けて、PCAも含めて人類の存続をかけて、“いのち”・生命維持や多様性への共存に日本国内のみならず全世界中が“一丸になって取り組むこと”が求められるでしょう。

- Fin -

《付記》

1. 本稿の初出は、筆者の名古屋大学定年退官記念最終講義・2003年3月「心理臨床への道」(①～③：3部作)です。これを下敷きに、本特集PCA用書き直して簡略化したもの、と退官後の職場(愛知学院大学と同朋大学)でのCCT・PCA活動を新規に追加したものであることとお断りします。①私の心理臨床の土壌－幼少年時代から青年期中期・高校時代までを語る－. 心理臨床－名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理教育相談室紀要、2003、18巻、1-7. ②心理臨床の道－第Ⅰ部：心理臨床への歩み－大学・学部から大学院時代までを語る. 名古屋大学大学院教育発達科学教育研究科紀要－心理発達科学－2002、第49巻、xxxi-xxxxi. ③心理臨床への道－第Ⅱ部：心理臨床への道－職業生活時代－. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要－心理発達科学－2002、第49巻、xxxxii-xxxxxix.
2. 本稿に引用した図「PCAの発展・展開の系統樹図・イメージ(田畑、2012)」は『人間性心理学ハンドブック』P.58創元社、2012年刊に掲載したものです。転載に当たっては日本人間性心理学会並びに創元社の許可を得ていることを記して感謝します。